

国立国会図書館



館長対談 第2回 印刷博物館館長 樺山紘一氏

人間の知的資産と図書館

誌上展示会
童画の世界
— 絵雑誌とその画家たち

開館 60 周年記念連載
第 6 回 デジタル時代の書誌情報
— 目録の 10 年

2008.11
No. 572

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
03(3506)3301(FAXサービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:00
	※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室および古典籍資料室の開室時間は17:00までです。	後日複写受付	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
資料請求時間	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00	オンライン複写受付	月～金曜日 10:00～17:30 土曜日 10:00～15:30
	※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室および古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。		

■見学のお申込み／国立国会図書館 資料提供部 利用者サービス企画課 03(3581)2331 内線26111

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
利用案内 0774(98)1212(FAXサービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求時間	月～土曜日 10:00～17:15	後日複写受付	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	オンライン複写受付	月～土曜日 10:00～17:00

■見学のお申込み／国立国会図書館関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声・FAXサービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
開館時間 火～日曜日 9:30～17:00
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

■見学のお申込み／国立国会図書館国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

支部東洋文庫

所在地 〒113-0021 東京都文京区本駒込2-28-21
電話番号 03(3942)0122[代表]
おもな資料 欧文、アジア諸言語で書かれた東洋全域に関する資料、モリソン文庫、岩崎文庫、チベット文献等

- 02 故実家栗原信充の研究資料（武具・馬具）
— 『古今要覧稿』の材料を中心に
今月の一冊 — 国立国会図書館の蔵書から —
- 04 国立国会図書館 館長対談 第2回 印刷博物館館長 樺山紘一氏
人間の知的資産と図書館
- 15 誌上展示会
童画の世界—絵雑誌とその画家たち
- 24 開館60周年を記念して
「1998-2008」この10年のトピックスと今後
第6回 デジタル時代の書誌情報—目録の10年
- 31 使う人がいる 守る人がいる (10) 複写
- 32 第19回保存フォーラムから
害虫を入れない・増やさない—図書館における総合的有害生物
管理 (IPM)

13 本屋にない本

- 『直江兼統 特別展』
- 『稲作とともに伝わった武器 平成19年春季特別展』

34 館内スコープ 無味乾燥な数字の裏に…

35 NDL NEWS

- 第31回国際児童図書評議会 (IBBY) 世界大会
- 平成20年度「国立国会図書館データベースフォーラム」

36 お知らせ

- 児童書デジタルライブラリーに約500タイトルの資料を追加しました
- 年末年始のご利用について
- 新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

故実家栗原信充の研究資料（武具・馬具）

大沼宜規

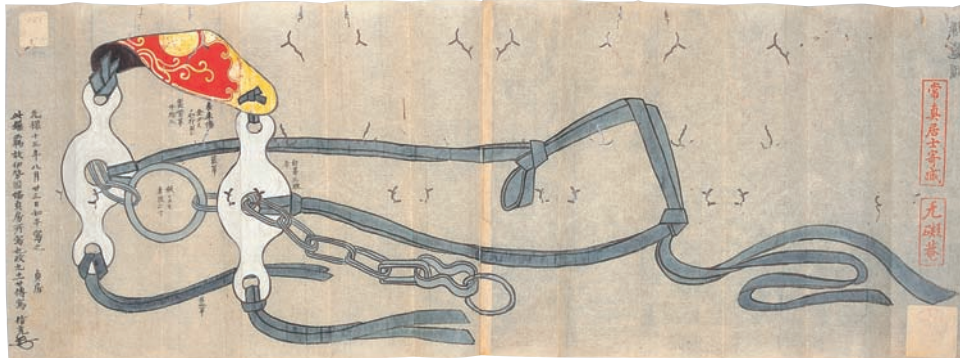


写真1 「鎖籠頭」。袋には「鎖籠」とある。

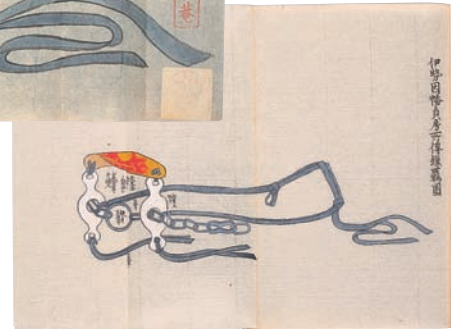


写真2 「古今要覧稿」器財部27巻「伊勢因幡貞房所伝鎖籠図」

国立国会図書館は、美術史家今泉雄作（1850-1931）の旧蔵資料を多数所蔵している。「茶道叢書」が有名だが、香道や琴、古器物など、日本の文化に関するさまざまな分野の資料も含まれている。中には、故実家・国学者である栗原信充（1794-1870）が『古今要覧稿』の執筆にあたり収集した材料と思われるものも見受けられる。

『古今要覧稿』は、屋代弘賢（1758-1841）を中心として編まれた江戸時代を代表する「類書」、すなわち現代でいえば百科事典にあたるような資料である。千巻を目標としたが、屋代弘賢の死により半ばで途絶した。栗原信充は屋代弘賢の弟子で、武器考証など故実研究に業績を残し、『古今要覧稿』の事業にも、そうした分野を中心に関わっていた事が知られている。

写真1「鎖籠頭」< YR8-N70 >は、馬の鼻に着ける馬具の解説図である。「此鎖籠故伊勢因幡貞房所写也政（ママ）

九十一廿伝写 信充（花押）」とあり、文政9（1826）年11月20日に栗原信充が描いたものと判断できる。当館蔵『古今要覧稿』< ぶ-1 >の「鎖籠」図（写真2）と、ほぼ同一と考えてよいだろう。そして、栗原信充が「編修」した『古今要覧稿』の「鎖頭」（「鎖籠」図を含む）の部分は、「鎖籠頭」の描かれた直後の文政9年12月に幕府に調進されていることから、「鎖籠頭」は、『古今要覧稿』の調査資料と推定してよいだろう。

7枚の馬具の図のうち2枚とほぼ同一の図が『古今要覧稿』に掲載されている「拍子」< W444-N14 >や、「筑紫長刀」< YR8-N46 >も、同様に『古今要覧稿』の調査資料と思われる。後者は袋裏に「文政十年六月十五日 信充記」とあるもので、拓本とともに中に収められた長刀の図には「辻左近太郎所持筑紫長刀」とある（写真3）。『古今要覧稿』の「筑紫長刀」の項目中にも、よく似た「辻

一 『古今要覧稿』 の材料を中心に



写真5 2種の鞭袋の模型。鞭袋の下部には、紙で作られた縫紐が通されている。これは、裏面全体に延びている。



写真4 「新納織部家蔵花氈ノ鞍覆之図」中の模型。鞍覆の内側にある紙で作られた紐が透けている。

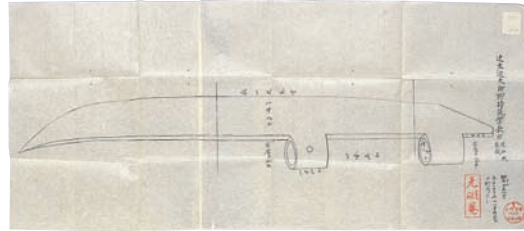


写真3
「辻左近太郎所持筑紫長刀」



写真6 一連の資料の一部。袋の中に図や模型が収められている。

左近太郎薙刀」図があり、3年後の天保元（1830）年12月25日に幕府に調進されている。

さて、『古今要覧稿』の「^{くらおおい}鞍覆」の部分を見ると、「花毛氈鞍覆 新納織部家鞍」の表裏の図が掲載されている。まるでクラゲのようで実物のイメージが湧きにくいですが、元となったと思われる模型が「新納織部家蔵花氈ノ鞍覆之図」< YR8-N55 >（写真4）に含まれている。立体としてご覧に入れられないのが残念だが、模型のリアリティーは図とは比較できない。このように、『古今要覧稿』には採録されなかった模型や図も含まれており、貴重な資料群ということができよう。

一連の栗原信充旧蔵の馬具や武具関係の資料には、『古今要覧稿』の調査資料ではないものも含まれている。たとえば、模型「^{むちぶくろ}鞭袋」< YR8-N67 >（写真5）には、^{（安政5（1858）年）}「戊午三月以元様製 栗原信充手摸」とある。とすると、四半世紀

を経てなお、馬具の資料を作成していたことになる。栗原信充にとって生涯をかけた研究だった。現在、好事家と評されることもある江戸時代後期の考証家であるが、長きにわたって集められた、丹念に描かれた図や作成された模型からは、当時の武家にとって重要であった故実研究にかけた学者の一念を感じることができよう。

なお、現在関西館で開催中の特別展示「国立国会図書館開館60周年記念貴重書展」に、栗原信充の担当部分ではないものの『古今要覧稿』の草稿や、屋代弘賢の関係資料を出陳した。展示図録や電子展示会で御覧いただきたい。
電子展示会：<http://www.ndl.go.jp/exhibit60/index.html>

参考文献：屋代弘賢『古今要覧稿』 国書刊行会 1905-07
< YDM101831 >

第2回 人間の知的資産と図書館

本を通して文化を 常に新しくしていく努力、 それが本に関わる文化です。

今月のお客様

印刷博物館館長 樺山 紘一 氏



情報技術革新の中でのこれからの日本の知的・文化的基盤の変化、あり方を中心としたテーマのもと、お客様をお迎えしています。

第2回は、人間の知的資産と図書館をテーマに、西洋的な「知」と日本、比較社会史的視点からみた「出版」や「情報」、知的活動における「場」の持つ意味などについて語っていただきました。

長尾 今日はお越し頂きましてありがとうございます。書庫などご覧になっていかがでしたか。

樺山 私も長く大学におりましたものですから大学の図書館にはずいぶんお世話になって、バックヤードがどうなっているかということについて知ってはいたのですが、国立国会図書館の書庫は、これだけの蔵書数を考えるとずいぶん整っているという印象を受けました。

長尾 新館は構造的にかなりうまく作ってありますから。

樺山 やっぱり図書館ですから合理的に出来ていることは大事なことです。本のおいがないと図書館に入った気がしない。

長尾 そうそう。やっぱり書庫は独特のおいがありますからね。

本という話になりますと、ヨーロッパにはプラトンやアリストテレスの頃から本があったわけですが、その頃はパピルスですか。

樺山 筆記用だったんですけど、もう一つは石板ですね。パピルスは軽くて安価だったので主流でした。よく知られているようにアレクサンドリアには大きな図書館があり、古代末になくなってしまいましたが、膨大な数の書籍があったといわれています。

長尾 数十万冊とかいわれていますね。

樺山 パピルスは巻いてありますので冊ではなくて巻なのです。そのアレクサンドリアの図書館のCGによる復元を仲間で作って見たことがあります。いろんな説がありますが、おそらく、回廊の形になっていて、両側の回廊の奥に棚があって、そこに巻物として並んでいたと。

長尾 なるほど。この頃から図書館を作っ

て学者を集めて研究させたというのは立派ですね。

樺山 このアレクサンドリアの図書館も、本来の名前はムセイオンとあって、博物館という意味もあります。書物を集めただけではなく、書物以外の物も収めていたでしょうし、教育施設と一体となっていたといえいいでしょうか。本を読むことと教育との一体感が大事だったのでしょうか。

長尾 ここで勉強したいといっているところから人が集まってきていたらしいですね。

樺山 アレクサンドリアは政治の中心であり、貿易の中心でもありますから交通の便がよい。学者もアレクサンドリアに行けばふつうは読むことのできない書物を読むことができる。この時代は印刷物がありませんからすべて写本で、一本しかない。

長尾 それから中世になって羊皮紙とかなになっていくわけですか。

樺山 パピルスから羊皮紙にすぐに代わったわけではなくて、重なっている時期もあります。羊皮紙は重いのですが書きやすさと読みやすさが改善されました。それをまとめた図書室ができてくる。ヨーロッパの場合、初期の図書室は修道院に付属した図書室でした。まだ大学ができる前ですので、図書室は修道院の一角にあって、修道士たちが祈りを捧げ働くと同時に書物を読む。

長尾 筆写もしたわけですね。

樺山 印刷がありませんから、写し取って自分たちのものにするとか、場合によってはそれが商売になる。

長尾 羊皮紙の本を鎖でつないでいるのがありますね。

長尾

図書館の概念が生まれたのには、
知識を広くいろいろな人に学ばせよう
という気持ちが根本にあったのか。



Makoto Nagao

1936年三重県生まれ 博士(工学)

専門は、自然言語処理、画像処理、パターン認識、電子図書館。

京都大学工学部電子工学科卒業、京都大学総長(第23代)、独立行政法人情報通信研究機構理事長を経て、2007年4月から国立国会図書館長。

私の問題意識

・人類の知・文化の結晶である本は、特に西洋においてどのような歴史をたどってきたのだろうか。

・種々の資料を収集して広く利用に供する図書館という概念はどのように形成されてきたのだろうか。

・本は社会を発展させ、社会に革新をもたらす力をもつ。本は文化を築き、読書は人々の心を豊かにしてきた。

榊山 印刷になってからもそうでした。なにせ高価で貴重ですので。

長尾 どういう発想で図書館という概念が出てきたのか。やはり知識を広くいろいろな人に学ばせようという気持ちが根本的にあったんですかね。

榊山 文書館としての側面と、物を考えるための手段としての書物館というのは別々のものではなかった。メソポタミアで楔形文字を用いていた時代でも、行政上の文書を取納する場所と、写本を取納する場所はだいたい同じところにありました。書物あるいは書物を集めたところの公共性とでもいいますか、パブリックな性格が早くから意識されていたことは間違いありません。本を集めることが趣味で本を読むことも趣味だという個人的コレクターがいたとしても、それとは別に、書物が公共的に、パブリックに所有されパブリックに利用されるという原則がアレクサンドリアの時代からある、ということだと思うのですね。

長尾 ルネサンスから後の時代になると、ヨーロッパの王さまは権威付けのために本を集めて図書館を作った。

榊山 よく知られている例としては、フランスの国立図書館で、リシュリユー館と名前の付いた建物があります。これは、宰相リシュリユーが個人的に収集していた書物を、最初のごく狭いサークルに見せていたものが、そのまま国の図書館に成長したわけですね。最初は個人コレクションだった。フランスの場合は早くからいわゆる納本制度がありますけれども、そうたくさん納本があったわけではない。小さなコレクションから国の図書館ができていった、そういうプロセ

スだった。

長尾 ヨーロッパの図書館が本を集めるだけではなくて楽譜やコインなどまで集めるというのは、そういった背景があるからなのでしょう。

榊山 博物館と図書館の区別があまりなされずに、どこからどこまでが博物館で、どこからが図書館かという意識なしにコレクションが進んだのでしょね。ヨーロッパの図書館には書物だけでなく版画の大きなコレクションがあります。印刷物だからということかもしれませんが。

長尾 活字印刷というのはヨーロッパ文化にずいぶん大きな影響を与えましたね。

榊山 写本の時代から印刷物の時代に移ると膨大な書物が流通するようになるということはよく説明されるとおりなのですが、その点から申しますと、東アジア諸国ではもっと早くから印刷が行われていた。7世紀くらい、唐の時代からです。ヨーロッパの人々はそれに遅れること700年、写本に不便を感じてきた人たちが印刷物に飛びついた。その爆発力がヨーロッパの近代文化を支えたのだと思います。

長尾 ヨーロッパで庶民まで本が行き渡って読まれるようになったのはいつごろなのでしょう。

榊山 18世紀が一つの大きなポイントだと思います。それ以前はいわゆる識字率といえますか、文字を読む力はたぶん日本より低かった。

長尾 日本では江戸時代の中ごろには庶民が読み書きできましたからね。

榊山 ヨーロッパの場合には、ようやく18世紀ごろに庶民が書物に手を出せるようになって



Koichi Kabayama

1941年東京都生まれ 歴史学者。
専門は西洋中世史、西洋文化史。
1976年 東京大学文学部助教授、1990年
東京大学文学部教授、1998年 文学部長、
東京大学名誉教授。
2001年 国立西洋美術館長、2005年 印刷
博物館館長。
著書に、『情報の文化史』（朝日新聞社、
1988年）、『西洋学事始』（日本評論社、
1982年）、『ルネサンスと地中海』（中央公
論社、1996年）、『地中海一人と町の肖像』（
岩波書店、2006年）など。

た。でも書物は安くありませんから一つは貸本を読む。

長尾 そんなことをヨーロッパでもやっていたのですか。

榊山 江戸の貸本と同じことですね。そのほかに粗末な小さな本を行商人が担いで町を歩いていた。日本とあまり変わらないですね。その頃ようやく、そう難しい本ではなくて庶民が普通に読めるものが出てきました。それから、まだ250年くらいだということになります。庶民が読めるようになったということと、それに並行して、いわゆる啓蒙主義哲学者たちが、知識は万人に共有されて、それが社会も変えていくんだ、という強い確信を持つようになる。私たちは啓蒙主義プロジェクトと呼んでいます、身分や地縁に関わらず書物を読むことによって自分を助けることもできるし国を作り上げていくこともできる、そういう共通意識ができあがっていく時代があるんですね。そうやってはじめて書物というものは大きな役割を果たすことができるようになるのではないのでしょうか。

長尾 ヨーロッパには私も何十回も行きましたが、長距離列車の中で分厚い本を読んでいるのをよく見ます。日本人の読書とずいぶん習慣が違うような気がしますが。

榊山 リゾート地で日向ぼっこしながらサングラスを掛けて大きな本を読んでいますよね。そのヨーロッパ人は地下鉄の中では本を読みません。先生のお宅の書齋にもご専門以外にもいろいろな書物があるでしょうが、あちらでは個人があまり本を持たない。偉い学者のお宅に招かれて食事をご馳走になって、ちょっと

書齋を拝見できますかと言って見せてもらうと本当に小さいんですね。

長尾 そんなに本を持っていない。

榊山 逆にからかわれましてね。日本では個人でたくさん本を持ってどうするのか、個人で図書館を建ててるんですかと。

長尾 大学のオフィスに行ってもそうなんですよね。必要な本だけを置いている。それにひきかえ日本の先生方は本だらけです。

榊山 書棚に入りきらなくて横に積んだり床に積んだり。これが私たちのふつうの姿です。

長尾 片や本を使ったら図書館に返す、片や使わなくても自分のそばにおいておきたい。

榊山 やはり書物はパブリックに共有されて図書館やそれに類するところにあればそれを読めばよいという考え方があって、自分のごく日常的に必要なものだけを手元においておくという意識なのでしょうね。

長尾 日本の出版社は2、3年で品切れにしてしまいますから、今読まなくてもひょっとして将来読むのではないかという本を買っておきますからね。

榊山 ヨーロッパでは20年から30年前の本が平気で売られている。フランスに行きますとまだフランの値札の付いた本があります。

長尾 そのあたりの出版文化の違いは大きなものだと思いますね。

榊山 出版社が息の長い本を作ったり売ったりする。図書館の方でも、多くの人たちが頼りにしているから特定の分野についてはもれなくコレクションして読める状態で管理していく。そういう差があるんじゃないでしょうか。

ミシェル・フーコーという著名な哲学者は長い間勤め先がなかったので、国立図書館（リシュリユー館）でずっと本を読んで、原稿を書いていた。学生と一緒に本を読んでそこから著作が出てきた。

長尾 なるほど。もう一つ気になることは、ヨーロッパでは本を集めるし、美術品でも、動植物標本でも、手紙でも、とにかく集めるということに執念をもっている。

樺山 書物があれば図書館になりますけれども、収集と分類がないとサイエンスが進まないというのがあるのでしょうか。大英博物館も昔は図書館と一緒にしたよね。作られたのは18世紀半ばですが、意識の上では、書物も、絵画も、いわゆる民族資料も含めて一つだったのではないのでしょうか。それを分類したり展示したり管理したりしながら専門の博物館や図書館ができあがってきた。それに250年くらいかかったのでしょうかね。

長尾 話は一挙に飛びますけれども、現代は電子化時代とか情報時代というので、本もデジタル化されていくし、美術館の絵もデジタル化してコンピュータで見られる時代になってきています。将来、博物館や図書館が有機的な統合体みたいになっていくと素晴らしいでしょうね。

樺山 よくMLAといわれますけれども、ミュージアム（M）とライブラリー（L）とアーカイブズ（A）はそれぞれ別の機能を持っていますが、それが全体として一つの機能を持っていると考える方がよいのだということです。私たちは博物館の仕事をしていますが、ライブラリーなしにはできません。図書館の場合には、かつては物を収納して、比較的狭い窓口で閲覧させていたという機能でやっ

てきたと思うのですが、デジタルな方法でアクセスできるようになりましたし、何らかの形で物を展示するという機能がついてきました。パリのフランス国立図書館のミッテラン館には展示室があって、惚れ惚れとするような展示会があります。

長尾 ああいうのを本当は国会図書館でもやれるといいなと思っているんですがね。

樺山 これだけのお宝がありますので、机で読むのも一つの接近方法ですが、何らかの形で公共の展示というものがあってもいいのではないかと思いますけれどもね。

長尾 それから非常に魅力的なPR誌をどんどん出していきたい。

樺山 この東京本館は建物としては40年経ってずいぶんと手狭になり、関西館を作ったわけですが、現実的に人間がここに来ますので使い勝手のよいように、展示室を含めまして、まだまだ工夫の余地があるのではないかと生意気なことを考えています。

長尾 そうなんです。いろいろ工夫の余地があると思います。正面から入ったところの雰囲気でも、工夫をすればもっと魅力的なものになるのではないかと思いますし、ここに来たらこんな面白いものが見られるんだ、という展示ができるといい。

樺山 そういう意味では国立公文書館は新しい努力をしているようですね。

長尾 本の持っている力というか、文化というものが日本人全体の活力になっていくということが広く知られていくような努力をしたいなあとと思っているんですけどね。

樺山 本離れ活字離れといわれますけれども、私はそんなに悲観しておりませんで、堅い読書はあまりしなくなっても、コンピュー

タで引き出した文字は読んでいるわけですし、how toものだって本なわけです。たくさん本を読むかどうかの問題ではなくて、本を文化の中の大事な部分として据え付けてそこから活力を引き出すことができるかどうかにかかっていますよね。

長尾 確かにそうだと思いますね。

榊山 本を通して文化を常に新しくしていくという努力、それが本に関わる文化だと思います。

長尾 経済現象にしろ、政治的なことにしろ、いろいろなことを判断するとき、自分のものの見方が文化的なものに支えられていれはういぶん違うだろうと思うんですね。

榊山 経済活動も文化に支えられてはじめて人間的な意味を持つことができるわけですね。政治もそうですね。啓蒙主義プロジェクトの頃の図書館では、書物の集積としての図書館が市民社会とか民主主義を支えていくものだという合意があった。本を読んだらすぐに民主社会ができるわけではないのですけれども、民主主義を支えていくのは、本を読み、本を通して知的な活力を発揮することができるということが前提にあって、みんな本を読めば健全な民主主義、市民社会ができるに違いないという共通理解があった。だから大英博物館もフランス国立図書館も皆その頃にできた。それが本の文化だったんですね。書物が民主主義を支えてきた。国立国会図書館は国会の図書館なわけですから、国会の立法機能を支えるのが第一のミッションなんですね。アメリカの議会図書館が先例としてあって、それを基にして考えたということがあったのでしょ

うけれども。

長尾 日本の図書館活動の総本山として国民の読書活動や、公共図書館をサポートするとか、いろいろな形で社会全般に対してサービスを展開して、国会の活動に間接的な形で役に立つということもあります。多角的な活動をやりながら日本全体に貢献していくことをやっていきたいなあ。

榊山 日本にはさまざまな図書館がありますね。たまたまこの本を読みたいからすぐに国会図書館に行って閲覧しようというのではいかにも迂遠で、むしろ近くのコミュニティで読めることはないか。ちょうど病院に例えてみれば、カゼをひいたときには家庭医にかかれはよい、少し難しくなったら少し大きい病院へ、一番難しい病気なら大学病院へ、というように、図書館は利用の段差に応じて機能が違うんだと思うんですね。国立国会図書館はナショナルセンターですから、誰でもぶらりと来てください、ではなくて、日本の図書館全体に目配りして、ここでなければならぬもの、国立国会図書館に行かなければならぬ書物を整備していただければ。それ以外のときにはもっとコミュニティの図書館なり大学の図書館なりを使うということが必要だと思います。

長尾 私どももそういうことを心がけて、ここにしかない本を図書館間貸出するなどやっていますが、一般の人たちがいろいろな図書館をうまく使ってもらわないといけませんね。

榊山 図書館を利用する側は、なんとなく永田町の大きい図書館に行けば必ずあるから安心だ、というように発想してしましますが、使い方の知恵を広めてほしいと思います。

書物で仕事をしている職業人にとっては、本はなくてはならないものですが、すべての本を手元に持っておくという発想はそろそろ変えていかなくてはいけないなと思っています。少なくとも自分だけで読むようなものを図書館に買ってこれというは無理難題ですが、皆が読むような文学全集を研究者が自分の書棚に置く必要はないでしょう。国語辞典や漢和辞典くらいは自分で持っていて、百科事典にはじまるレファレンス関係の書物は、なるべく広く図書館が持っていれば、自分で持っていなくてもいいと。さらに、図書館が比較的近いところにあればよい。

長尾 図書館はそれぞれ選書についてよほどきっちり考えてやっていかないといけない。

樺山 やみくもにベストセラーをたくさん揃えて、地域住民が読んでくれれば実績が上がる、というのではダメだぞ、ということです。本というのはいったいつまで存在しうるのか、なくなるのではないかという議論があります。情報検索という観点からいけば本は必要ないということです。しかし本は表紙があって、著者名があって、たとえば350ページの厚さがあるという実体感があります。ある種の知識には実体感が必要かもしれません。

長尾 文化という観点でみると、紙の質とかレイアウトとか。

樺山 装丁ですとか、文字の大きさとか、それら抜きで知的な世界が完結するとは思えません。漫然と情報を提供すればよいという書物だけでは先はそう長くないだろうと思います。

長尾 そうかもしれませんね。

樺山 印刷博物館では古い活字を残しています。活字を拾って版にして、手刷りの印刷機で刷ってみるという実習の場を作っていますが、小学生やデザイン学校の学生から大変な人気なのです。この人たちは活字を拾って印刷した本を読んだことがない。情報検索はパソコンの画面でいい。しかし何か特別な意味を持ったテキストとか、図像とかを手触り感のある印刷にしてみると、訴える力が違うというのです。

長尾 ある種のリバイバルが来るかもしれませんね。

樺山 非効率に見えるのですが、スローな文化というのがあるのです。必要なところだけアクセスして途中はどうでもよい、というのではなく、始めから終わりまで見渡して、著者が何を考えてどのような世界を作り出しているのかと直接向き合う読書も必要ですね。

長尾 著作者や出版社は本のデジタル化によってそういうものが消えていくことを非常に危惧していますね。

樺山 情報を作って送り出す側も、どんなに断片化してくれてもいいという情報もあるでしょうし、どこに何が隠されているか丹念に読んでほしいというものもあるでしょう。後者は書物でないと体得できないでしょう。このような書物は残るでしょうし、残るような書物をわれわれも作らなければならない。

長尾 出版社もそういういい本を出してもらいたいですね。最近の出版状況はなかなか心配な面がたくさんあるようですが。

樺山 出版界や学校の先生方も危機感を持っているようですので、そういった方々の努力に賭けたいと思います。

長尾 2010年は国民読書年だと国会で決議しまして、国立国会図書館としても、読書のレベルが上がる、読書が活性化するように頑張りたいと思っています。

榊山 私も本を読んだり書いたりすることを職業としているので、微力ながらお手伝いしたいと思います。

長尾 今日はどうもありがとうございました。

対談を終えて――

本のもつ力が改めて理解できた。それは学問を発達させる力であり、人の心をふるいたたせる力であり、社会を変えてゆく力である。電子図書館にむけて転換してゆこうとする時代において、物としての本のもつ魅力が再認識されるようになるのではなかろうか。当館は「知識はわれらを豊かにする」という標語を掲げているが、「本はわれらを豊かにする」でもあろう。 (長尾)



写真1 総合展示ゾーン
印刷と文化の関わりが多目的に展示されている



写真2 印刷工房
活版印刷を中心とした印刷技術を体験できる



写真3
プロローグ展示ゾーン
史料とミニチュアにより、コミュニケーションメディアとしての印刷の歴史がわかる

用語解説

1. フランス国立図書館 Bibliothèque nationale de France
1367年にシャルル5世によって創立された王立図書館を起源とする。2区のリシュリュー通りにある旧館と、13区のベルシー地区にある本館（フランソワ・ミッテラン図書館）からなる。14世紀のフランス王室の図書室に起源をもつ。その後、フランソワ1世は、1537年モンペリエの勅令で印刷本の納本制度を作って領内で印刷された本を集め、ビブリオテーク・ナショナルの基礎を確立した。1537年の勅令は現在も有効である。図書館には1000万を超える書籍と35万束の原稿・写本に加え、地図、コイン、文書、版画、レコードなどが所蔵されている。

2. MLA

これまで個々に別の機能として認識されていた博物館・美術館 (Museum)、図書館 (Library)、文書館 (Archive) の活動の、共通点や連携すべき点を捉える考え方。電子化の進展によって、資料や利用について、それぞれを分けていた垣根が低くなり、この三つが融合する方向に向かっているといわれている。英国では1999年に文化政策に関する諮問機関が再編成された「博物館・図書館・文書館評議会」ができて、図書館、博物館、文書館を支援している。

3. 2010年の国民読書年

衆参両院が2008年6月6日の本会議で全会一致で採択した決議。この決議では「文字・活字を受け継ぎ、更に発展させ、心豊かな社会の実現につなげていくことは、今の世に生きる我々が負うべき重大な責務」と明記している。我が国での活字離れの現状を受け止め、2005年の文字・活字文化振興法制定から5年目にあたる2010年を「国民読書年」と定めることとした。

4. 印刷博物館 (写真1～3)

コミュニケーションメディアとしての印刷の価値や可能性を紹介し、印刷への理解と関心を深めることを目的とした博物館。印刷の過去、現在、未来をわかりやすく伝える展示（企画展示、総合展示）のほか、ライブラリ、多目的ギャラリーも備える。

5. 石板・パピルス・羊皮紙 (写真3)

紙が使われる以前には、古代メソポタミアでは石や粘土板、古代エジプトではカヤツリグサ科の植物の繊維で作られたパピルス（3、4000年前頃～）が筆写に使われた。羊の皮で作られた羊皮紙（紀元前2世紀頃～中世末）はヨーロッパで紙が普及するまで用いられた。

6. 活字 (写真2)

活版印刷に用いる字型。合金を鋳造して作った角柱に字を左右逆に浮き彫りにしたもの。字体、大きさとも数多くある。これらを組んで活版印刷する。古くは石や木で作られた。

(この対談は、2008年7月16日に国立国会図書館で行われました。)

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

直江兼統 特別展

米沢市上杉博物館
〒992-0052 山形県米沢市丸の内一丁目2番1号
2007.4 127頁 A4 (GK95-H50)

日曜の夜はNHK大河ドラマを見ないと終わらない、という人は、少なくないだろう。かくいう私もその一人である。

大河ドラマの魅力はいろいろとあるが、日本史の教科書に出てくるような有名人を主人公にしてその生涯を描くスケールの大きさがひとつに挙げられると思う。ところが、最近の大河ドラマときたら、名前も聞いたことのない人物ばかり主人公にする。そう思っている人も、少なくないのではないだろうか。

来年2009年のNHK大河ドラマ「天地人」の主人公は、なおえかねつぐ直江兼統なのだそう。直江兼統といえば、戦国大名上杉氏の重臣で、関が原の合戦では上杉軍を率いて東北地方の西軍方の中心となって戦い、また合戦後は米沢藩30万石の執政として藩の基礎を築いた戦国武将である。

本書は、この人物を取り上げて、山形県米沢市の上杉博物館で平成19年4月14日から6月3日まで開かれた特別展の図録である。

本書を開くと、手書きの難解な文字が記された古文書の写真が並び、視覚には一見地味である。しかし、本書においては、この点こそが最大の魅力となっている。

本書には、米沢市の所有する国宝「上杉家文書」をはじめとする多くの貴重な古文書が登場する。これらの文書は全ページにわたってカラーで大きな図版によって収録されており、読者は、写真を通して、

展覧会に足を運ばずとも史料に接することができる。しかも、その文書のひとつひとつは、詳細な解説によってその内容が丹念に読み解かれている。

特筆したいのは、収録された古文書

は、図版とともにそのすべてが活字に起こされていることである。そのおかげで、読者は古文書の判読ができなくても、一次史料から歴史の実像に肉薄する歴史学者の仕事を追体験できる。また、兼統旧蔵の漢籍や兼統作の漢詩文も紹介され、深い教養を備えた文人政治家としての側面も理解できるよう配慮されている。

このように本書は、歴史上の兼統の実像が、時系列で並べられた古文書の間から見事に浮かび上がってくる構成を取っている。

実際に本書を手にとると、写真を横目に眺めつつ解説を読み進めるだけで兼統について勉強になるし、写真の古文書と活字を見比べ、解説に助けられつつ古文書を読み解くのも楽しい。本書は、展覧会を超えて、兼統について学びたいすべての人にとって非常に充実した一冊である。直江兼統の名前を初めて耳にするという大河ドラマファンも、本書を手に入れば放送前からしっかり予習できるはずだ。

はやしゆんすけ
(林 瞬介)



稲作とともに伝わった武器 平成19年春季特別展

大阪府立弥生文化博物館編
〒594-0083 大阪府和泉市池上町443
2007.4 133頁 A4

(GB115-H61)

「稲作」と「武器」とは、少々ショッキングな結びつきである。方や平和な水田風景、方や血なまぐさい戦闘をイメージさせ、一見相反するようにも見える二つの要素が、弥生時代というキーワードで結び付けられている。本書は2007年に大阪府立弥生文化博物館で開催された春季特別展の図録である。

本書は大きく三つに分けることができる。最初の部分は、実際の展示会に相当するパートである。弓、矢、^や、^{とうだん}、^{けん}、^{ほこ}、^か、^{おの}、^{たて}、^{こう}など様々な種類の武器が用途別、テーマ別に紹介される。難しい用語に振られたルビと豊富なカラー図版は筆者のような考古学の素人にとっても大いに理解の助けになる。テーマ別では、武器の素材や製法、武器使用の痕跡とそのもつ意味、祭りの道具や副葬品としての武器など、弥生時代の武器が持っていた多様な側面をうかがい知ることができる。「縄文時代に戦いはあったか」など三つのコラムもわかりやすく、興味深い。

第2の部分は、より専門的だ。青銅武器のデジタル実体顕微鏡を用いた「分析」につづき、「東海・沖積低地の弥生時代の武器とその素材」(赤塚次郎)など特別論考が4本収められている。武器素材とデザインの地域差、農耕社会における武装の意味、戦いの心性の広がり、弥生人にとっての青銅武器とはなど、弥生人と武器をテーマにしたこれらの学術論

考を読むと、展示会の舞台裏ともいえる考古学研究的現場をのぞき見しているような気分になる。

第3の部分は、古典的名著であるV. G. チャイルドの「先史時代の戦い」の翻訳(金関恕)と解説(佐



原真)である。これまでの二つの部分が日本のしかも弥生時代を中心に扱っているのに対して、この著作は全世界の先史時代を扱っている。一気にスケールアップして、弥生時代の武器を改めて世界史の中に位置づけて見直す、そんなぜいたくな計らいである。

最後に付された目録や参考文献なども読んでみると面白い。よくよく見ると図版目録と展示会の出品目録が少々違うことにも気づかされる。本書は展示会を紙上で再現したものというより、本という媒体を生かした独自の企画物と言ってさしつかえなからう。

本書で少し不満とするところがあるならば、タイトルの与えるインパクトほどには稲作と武器の関連が語られていないことだろう。なぜ稲作と武器が時期を同じくして伝播していったのかなどと素朴に知りたいと思うのだが、「あとがき」にはこうある。「ある意味で負の遺産といえる武器や戦いがはじめて登場した社会が、現代社会に語ることは何か」を「考えなおす契機となれば」と。本書を読んだひとりひとりが考えるべき重い問題なのかもしれない。

ふくだ あきら
(福田 亮)

童画の世界

－ 絵雑誌とその画家たち

開催
期間

平成20年9月20日(土)～

平成21年2月15日(日) 9時30分～17時

国際子ども図書館 3階 本のミュージアム

来年の2月15日まで「童画の世界－絵雑誌とその画家たち」というテーマで、当館で所蔵している絵雑誌を中心にした展示会を開催しています。大正デモクラシーの中で一気に花開いた童画と、それを読者に運んだ絵雑誌は児童文化の発展の中でも一つの到達点となっています。途中で展示資料の入替えを行いながら、延べ約400点の資料を展示いたします。

国立国会図書館国際子ども図書館展示会

童画の世界

World of Illustrations for Children: Picture Magazines and Their Artists

絵雑誌とその画家たち

開催期間 平成20年9月20日(土)～平成21年2月15日(日)

開催時間 午前9時30分～午後5時

開催場所 国立国会図書館国際子ども図書館
3階 本のミュージアム
〒110-0007 東京都台東区上野公園 12-49
Tel: 03-3827-2053(代表)
Fax: 03-3827-2043
http://www.kodomo.go.jp/

会期中の休館日
月曜日、国民の祝日・休日、年末年始、
資料整理休日(第三水曜日)

入場無料

北村 武雄「春の学校の風景」
『こどもクニ』110巻4号(1931.4)

坂本 信一「春の朝」
『こどもクニ』117巻3号(1928.3)

田中 画「ハハトリデー」
『こどもクニ』115巻11号(1930.9)

International Library of Children's Literature
国立国会図書館国際子ども図書館



岡本帰一 「ボクノオ室」(「コドモノクニ」10巻6号(1931.5))

第1部 絵雑誌の歩み

近代日本の児童文化の発展は、児童文学から始まるとされています。そして、その児童文学のメディアとして用いられたのが、大量生産され安価に入手できる児童雑誌でした。「少年園」、「小国民」、「少年世界」などの児童雑誌が相次いで創刊され、その後、性別、年齢による分化を経て多様化し、幼年絵雑誌が登場しました。絵雑誌の嚆矢といわれる「お伽絵解こども」が明治37(1904)年に刊行、その後、「幼年画報」「コドモ」「子供之友」「日本幼年」が相次いで刊行されます。大正デモクラシーの機運の中、欧米で流行していた教育運動が日本でも取り入れられ、「児童中心主義」の教育が盛んになると、児童雑誌でも、「赤い鳥」をはじめ、「おとぎの世界」「金の船」(後の「金の星」)「童話」など、芸術性を重視する文芸雑誌が続けて創刊され、同時に、より質の高い絵画をメインにした幼年絵雑誌が誕生しました。幼児教育の高揚を背景に生まれたのが「コドモノクニ」です。その出現に刺激され、

さらに、「コドモアサヒ」「キンダーブック」などが刊行されます。画家の武井武雄は、それらに施された絵が、単に文章に添えられた挿絵ではなく、「子どもに与える目的で描かれた絵画」だとして「童画」と命名しました。しかし、昭和に入って、絵雑誌は戦争などの影響で、統合されつつ衰退していきました。

第一章 草創期：

児童雑誌の誕生とカラー絵雑誌の萌芽

明治後期の児童雑誌に添えられた挿絵は、近世の絵草子の流れを汲むものもあれば、多色刷りの口絵や、ポンチ絵であったりと、新旧様々な趣向が凝らされていました。しかし、画家名が明記されていないものも多く、絵は添え物と見られていました。その中で、「お伽絵解こども」は、表紙から裏表紙に至るまで色刷りの絵を採用し、絵雑誌の先駆となりました。大正期に入ってから、数多くの絵雑誌が刊行され、文字を知らない子どもたちが絵を楽しみ、絵で学ぶ要素を様々な形で模索しつつ、発展していきます。

第二章 黄金期：

絵雑誌黄金時代の到来と幼児文化の確立

黄金時代を築いた「コドモノクニ」をはじめとする絵雑誌は、近代的な児童観に立って、芸術的に質の高い幼児文化を確立しました。画家による個性あふれる絵だけでなく、幼児自身が自由に表現した創作童謡や創作画が募集され、掲載されました。

(1) 「子供之友」

羽仁もと子が、良質な子どもの雑誌を求める母親の声に答えて、大正3(1914)年に創刊しました。よい生活習慣や道德観念の習得をめざす羽仁もと子の教育理念に基づいた編集方針が見られます。特に生活態度の良悪の違いを絵と文で示す「甲子上太郎」(下)は、「子供之友」の独自企画であり、子どもたちの大きな支持を得ました。これまでの絵雑誌が絵、文とも無記名が多かった中で「子供之友」は創刊当初から著者名・画家名をも表記し、その後の画家たちの地位を向上させるきっかけともなりました。

(2) 「コドモノクニ」

東京社を経営する鷹見久太郎は、大正11(1922)年1月に「コドモノクニ」を創刊、絵雑誌の黄金時代を築きました。丈夫で厚手の画用紙のような紙とオフセット五色刷りにより、独特の柔らかい色彩を出しています。初代編集主任の和田古江^{ここう}は、教育学者の倉橋惣三^{そうぞう}を編集顧問に迎え、芸術に重きを置いた方向性を定めます。童謡顧問に北原白秋、野口雨情、作曲顧問に中山晋平、絵画主任に岡本帰一と当時それぞれの分野で一流のメンバーを結集し、絵、文、音楽の融合を実現しました。「コドモノクニ」が対象としたおもな読者は、新興市民層の子どもたちでした。西洋風の家に住み、洋服を着た子どもたちの生活が、童画家たちの個性的なスタイルで繰り返し描かれ、都市に生活する子どもたちの洒落なイメージを主体に置くことで、他誌と一線を画しました。



北沢楽天「甲子上太郎」
 (「子供之友」3巻7号(1916年7月))
 甲子と上太郎、乙子と中太郎、丙子と下太郎がそれぞれよい子、ふつうの子、悪い子の違いを示している。



「コドモノクニ」8巻8号 (1929.6)



「コドモアサヒ」1巻1号 (1923.11)



「子供之友」4巻1号 (1917.1)



「キンダーブック」第1編 (1927.11)
(復刻キンダーブック)



本田庄太郎「オテツダヒ」(「キンダーブック」
11輯9編 (1938.12))

(3) 「コドモアサヒ」

「コドモノクニ」に非常に似た企画でしたが、大阪朝日新聞社の学芸部員が絵を担当したり、社員が編集に加わっていたりしたことでニュース性のある記事も掲載されていたことが特色でした。

(4) 「キンダーブック」

わが国初の月刊保育絵本。大正15(1926)年に公布された「幼稚園令」により保育項目に「観察」が加えられたことによって観察絵本の本誌が創刊されました。書籍の小売店を通さずに、幼稚園に直接販売する方式を編み出し、大判で刊行されたことが特色です。

第三章 衰退期：絵雑誌の統合と衰退

満州事変の勃発とともに、戦争の影がさまざまな形で絵雑誌にも影を落とし始めていました(左ページ下)。戦局が進むにしたがって、ほとんどの絵雑誌が版型を縮小し、紙質も落ち、ページ数も減ってきます。また、表紙から童画家の絵が消え、次第に写真や風景画などが増えてきました。「コドモノクニ」でも、かつての洒脱な子どもの姿は消え、防空壕や慰問袋を作る子どもの姿など、当時の生活に密着した題材が描かれるようになります。

やがて、企業整備による出版社の統廃合がなされ、「子供之友」は昭和18年12月号で休刊、「コドモノクニ」は昭和19年3月号で廃刊、「ミクニノコドモ」など他の絵雑誌も、昭和20(1945)年1月の時点で「日本ノコドモ」1誌に統合され、同誌も3月の東京大空襲により休刊となりました。

童画・絵雑誌関連年表

草創期	明治 21(1888)	「少年園」創刊	
	明治 22(1889)	大日本帝国憲法発布 「小国民」創刊	
	明治 24(1891)	「幼年雑誌」創刊	
	明治 27(1894)	日清戦争(～明治 28 年)	
	明治 28(1895)	「少年世界」(「幼年雑誌」等を合併)創刊	
	明治 33(1900)	私製絵葉書の誕生 「幼年世界」[第一次]創刊	
	明治 35(1902)	「少年界」「少女界」創刊 「少年界」表紙の多色刷り実現	
	明治 37(1904)	日露戦争(～明治 38 年) 「お伽絵解こども」創刊	
	明治 38(1905)	「少年智識画報」「少女智識画報」「家庭教育絵はなし」創刊	
	明治 39(1906)	「幼年畫報」「日本少年」「少女世界」創刊	
	明治 41(1908)	「お伽画帖」(博文館)刊行開始 「少女の友」「フレンド」創刊	
	明治 42(1909)	「幼年の友」創刊	
	明治 44(1911)	「幼年世界」[第2次]創刊	
	明治 45(1912)	「少女画報」創刊	
	黄金期	大正 3(1914)	第一次世界大戦(～大正 7 年) 「子供之友」「少年倶楽部」「コドモ」創刊
大正 4(1915)		「日本幼年」「トモダチ」「日本の子供」創刊	
大正 5(1916)		「幼年園」創刊	
大正 6(1917)		「幼女繪噺」「幼女の友」創刊	
大正 7(1918)		「赤い鳥」「少女畫報」創刊	
大正 8(1919)		「金の船」「おとぎの世界」「小學男生」創刊	
大正 9(1920)		国際連盟設立 東京市立日比谷図書館 児童室開設	
大正 11(1922)		ソビエト社会主義共和国連邦樹立 「コドモノクニ」創刊 「金の星」(「金の船」の改題)	
大正 12(1923)		関東大震災 「コドモアサヒ」「少女倶楽部」創刊	
大正 14(1925)		武井武雄個展開催(銀座資生堂)	
大正 15(1926)		幼稚園令：保育項目に「観察」が加わる 童話作家協会設立 「幼年倶楽部」創刊	
昭和 2(1927)		金融恐慌 日本童画家協会設立 「キンダーブック」創刊	
昭和 4(1929)		世界恐慌	
衰退期		昭和 6(1931)	満州事変 「赤い鳥」復刊
		昭和 7(1932)	新ニッポン童画会設立
	昭和 12(1937)	盧溝橋事件・日中戦争 日本児童文化協会結成「コドモノヒカリ」創刊	
	昭和 13(1938)	国家総動員法の公布 いわゆる「児童読物改善に関する指示要綱」通達(内務省警保局図書課)	
	昭和 14(1939)	第二次世界大戦(～昭和 20 年) 日本児童絵本出版協会結成 少年少女雑誌編集者の会(青葉会)結成	
	昭和 15(1940)	「新聞雑誌用紙統制委員会」設置(閣議決定) 日本出版文化協会設立	
	昭和 16(1941)	日本少国民文化協会結成	
	昭和 17(1942)	すべての出版企画が発行承認制に移行 用紙の割当てが日本出版文化協会の統制下におかれる 「ミクニノコドモ」(「キンダーブック」の改題) 「週刊少国民」創刊	
	昭和 18(1943)	日本出版会が設立認可される	
	昭和 19(1944)	学童疎開第一陣(東京) 出版社の統廃合 幼年向け月刊絵雑誌は「日本ノコドモ」のみとなる 「日本ノコドモ」「ミクニノコドモ」「コドモノヒカリ」等を統合)創刊	
昭和 20(1945)	終戦		



第2部 童画家たちの世界

「赤い鳥」の清水良雄、「おとぎの世界」の初山滋、「金の船」の岡本帰一、「童話」の川上四郎、「まなびの友」の村山知義といったように、それぞれの雑誌には主筆として担当の画家がついていましたが、「コドモノクニ」が創刊されるにあたり、各雑誌の童画家が集結しました。一方、日本漫画の祖として有名な北沢楽天、独特の美人画で知られる竹久夢二、日本画の東山新吉（魁夷）、西洋画の古賀春江などの画家たちも絵雑誌に作品を描いていました。



川上四郎「星まつり」(「コドモノクニ」11巻8号(1932.7))



清水良雄(「コドモノクニ」8巻12号(1929.9)表紙)



初山滋「ハヘトリデー」(「コドモノクニ」15巻11号(1936.9))



竹久夢二(タイトル不明)(「子供之友」3巻7号(1916.7))



村山知義「せい順」(子供之友13巻1号(1926.1))
(['村山知義童画集』村山知義 婦人之友2004)



古賀春江「四月の散歩」(『コドモノクニ』11巻4号(1932.4))



岡本帰一「赤ちゃんの握手」
(['コドモノクニ』9巻11号(1930.11))



武井武雄「雀の学校の遠足」
(['コドモノクニ』10巻4号(1931.4))



● 特別コーナー

草創期から衰退期に至る絵雑誌の流れは、同時代に起こった様々な文化や教育の動きと無関係ではありませんでした。特別コーナーではそれらのトピックを取り上げました。

(1) 童話－大正期を中心に－

鈴木三重吉が大正7(1918)年に「赤い鳥」を創刊、大正期の芸術的な童話、童謡の隆盛の中で中心的役割を果たしました。また、小川未明監修の「おとぎの世界」、島崎藤村と有島生馬が監修した「金の船」、千葉県三が編集に加わった「童話」など、「おとぎ話」とは違う新しい「童話」が次々に発表されていきました。

(2) 童謡－大正期を中心に－



「赤い鳥」創刊と同時に鈴木三重吉は童謡運動を起こし、唱歌やわらべ歌と区別して、子どものための創作歌曲を「童謡」と呼びました。「赤い鳥」の北原白秋、西条八十、「金の船」の



「コドモノクニ」3巻5号(1924.5) (個人蔵)
上 「兔のダンス」野口雨情 作 中山晋平 曲
下 「兔のダンス」野口雨情 作 岡本帰一 絵

野口雨情という後に三大童謡詩人と呼ばれる詩人が「コドモノクニ」に結集し、岡本帰一、初山滋、清水良雄らが童謡に絵を添え、一時代を築きました。

(3) 幼児教育

絵雑誌では、絵と様々な身体活動を組み合わせた総合的な幼児教育の試みが行われました。童謡に振り付けられた新しい遊戯運動が、幼児教育や家庭教育の場に普及しました。

(4) 自由画運動

童話雑誌・絵雑誌には投稿欄があり、子どもたちは身の回りのものをテーマとした自由画を応募しました。「子供之友」では、運動の主導者であった山本鼎、「コドモノクニ」では、岡本帰一、武井武雄などが選評を行い、昭和18(1943)年ごろまで子どもたちの応募作品が掲載されました。

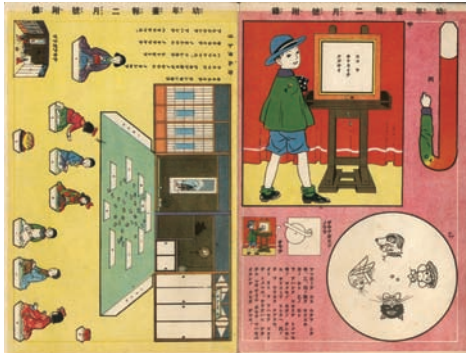
(5) 海外文化の受容

明治期以降、日本でも盛んに海外の文化が紹介され、受容されていきます。「コドモノクニ」や「子供之友」ではロシアやフランスなど海外の児童文学、絵本、昔話などを数多く紹介しています。また、クリスマスも紹介され、歳末の風景としてサンタクロースが絵雑誌にも多く登場しました。

(6) 付録

当初、付録は「本誌内の別頁を付けた特別記事」を指していましたが、「小国民」明治23年1月号に双六が付けられて以降、双六は雑誌の正月号の恒例となり、付録として定着します。大正期に入ってから、童画家たちの絵による、組立式の紙おもちゃ・ぬり絵・カレンダーなどの様々な趣向を凝

「幼年畫報」 18巻2号 (1923.2) 付録



らした付録が付けられるようになりましたが、昭和13(1938)年に「正月号」を除いて付録が禁止されると、急速に勢いを失いました。

(7) 子どもの本の叢書

大正4(1915)年から刊行の『模範家庭文庫』(富山房)をはじめとして、美しい挿絵や装丁による子どもの本の叢書が相次いで刊行されました。これらの叢書は、戦後の創作絵本の先駆として位置づけられます。一方、大正末期に起こった1冊1円の予約出版全集のブームは、子どもの本にも波及し、『日本児童文庫』(アルス社)が刊行されました。

(8) 童画家による漫画

大正13(1924)年創刊の本格的な子ども漫画雑誌「子供パック」をきっかけに、大正末期から子ども向け漫画が新たなジャンルとして人気を博していきました。「コドモノクニ」や「コドモアサヒ」といった絵雑誌にも漫画ページが設けられ、コマ割り形式の作品が掲載されました。

なお、今回の展示会開催にあたり、大阪国際児童文学館、京都女子大学図書館、ちひろ美術館、弥生美術館、早稲田大学津八ー記念博物館から童画の原画や当館で所蔵していない貴重な資料をお借りしました。

また、監修を日本児童教育専門学校副校長岩崎真理子氏にお願いしました。

(国際子ども図書館「童画の世界－絵雑誌とその画家たち」展示班)

参考文献

- 赤い鳥 複製版 総索引「解説」
日本近代文学館 1968
- 上笙一郎、尾崎真人監修 『<池袋モンパルナス>の童画家たち』 明石書店 2006
- 石沢小枝子、島山兆子 「絵雑誌「コドモアサヒ」解題と総目次」
(梅花女子大学文学部紀要 児童文学篇 22(1987))
- 島山兆子 「絵雑誌「コドモアサヒ」総目次 補遺」
(梅花女子大学文学部紀要 児童文学篇 23(1988))
- 絵本(「別冊太陽」No.45 平凡社 1984.3)
- 上笙一郎編著 『聞き書・日本児童出版美術史』
太平出版社 1974
- 『月刊保育絵本クロニクル』
日本児童出版美術家連盟 2005
- 中村悦子、岩崎真理子編 『「コドモノクニ」総目次.上・下』
久山社 1996-1998
- 日本国際児童図書評議会事業委員会子どもの本・1920年代
展実行委員会企画制作 『子どもの本・1920年代展図
録』 日本国際児童図書評議会 1991
- 堀江あき子、谷口朋子編 『こどもパラダイス』
河出書房新社 2005
- 雑誌「おとぎの世界」復刻版解説・総目次・執筆者一覧
岩崎書店 1984
- 雑誌「金の船・金の星」復刻版解説
ほるぷ出版 1983
- 上笙一郎 『児童出版美術の散歩道』
理論社 1980
- 日本児童文学学会編 『児童文学事典』
東京書籍 1988
- 日外アソシエーツ株式会社編 『児童文化人名事典』
日外アソシエーツ 1996
- 鳥越信 『小さな絵本美術館』
ミネルヴァ書房 2005
- 茨城県近代美術館編 『童画のバイオニアたち』
茨城県近代美術館 1992
- 大阪国際児童文学館編 『日本児童文学大事典』
大日本図書 1993
- 上笙一郎 『日本の童画家たち』
平凡社 2006
- 鳥越信編著 『はじめて学ぶ日本の絵本史 1～3』
ミネルヴァ書房 2001-2002
- フレーベル館編 『フレーベル館七十年史』
フレーベル館 1977
- 武井武雄 『本とその周辺 改版』
中央公論新社 2006
- 中村悦子 『幼年絵雑誌の世界』
高文堂出版社 1989

お悔やみ
監修の岩崎真理子先生が10月6日、急逝されました。
謹んでお悔やみ申し上げます。



写真1



写真2

第6回 デジタル時代の書誌情報—目録の10年

はじめに

日本の刊行物の書誌である『日本全国書誌』を作成し、その書誌情報を広く役立ててもらうため、また、所蔵資料を組織的に管理し、利用に供していくための書誌情報と目録の整備・提供は、国立国会図書館の業務の大きな柱の一つです。今回は、この10年を中心として、書誌情報と目録はどう変わったのか、そしてこれから何を指すのかについてご紹介します。

なお、ここでは、「書誌情報」は、資料のいろいろな特性を記録した1件ごとのデータの意味で、また、「目録」は、多くの書誌情報や所蔵情報等を検索できるようにした仕組みを指すものとして、話を進めることにします。

1 目録検索と書誌情報

1.1 目録ホールの景観から

一昔前、といっても1990年代中頃までの国立国会図書館の本館目録ホールを覚えていますか？

ホールの四方には重厚な木製のカードケースが立ち並び、壁際には分厚い冊子の蔵書目録が並んでいます(写真1)。著者名、書名、件名などのカード目録の間を渡り歩き、ABC順やアイウエオ順の目録カードを練りながら、求める資料の目録カードを探し出す、それが資料に到達する第一歩でした。

その景観が徐々に変わり始めたのは、1989年の和図書CD-ROM目録(J-BISC)用コンピュータ端末の登場からといえるでしょう。1992年には洋図書のオンライン閲覧用目録(OPAC)が加わり、

1997年3月末には和図書のカード目録の繰込み（コラムその1）を中止、和図書 OPAC がそれに替わる検索手段となりました。

その後、館内の閲覧用目録は、1999年7月には和・洋図書、逐次刊行物等が検索できる Web-OPAC に、さらに、東京本館では2003年3月から、関西館では2002年10月の開館時から、現在の NDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム）へと移り変わってきました。OPAC 端末の数もどんどん増え、2006年以降（写真2）、東京本館だけで約200台が配置されています。それに伴って、カード目録は徐々に撤去され、帝国図書館時代の目録など一部を残すのみになっています。

1.2 書誌情報の整備—データベース化と遡及入力

まずは目録ホールの変容の話から始めましたが、その変化には、時代にふさわしい検索システムの開発が必要だっただけでなく、書誌情報そのもののデータベース化が不可欠でした。

国立国会図書館では、1970年代初頭にコンピュータを導入、整理業務の機械化と書誌情報のデータベース化に取り組んできました。1981年には国内刊行図書の新規書誌情報を機械可読目録の

JAPAN/MARC として頒布を開始、週刊で刊行する『日本全国書誌』、国内外の図書館で目録カードとして利用される印刷カードも、和図書のデータベースシステムから出力するようになりました。

日々の目録作業とともに、それまでカードや冊子体で作成してきた目録も遡って入力し、JAPAN/MARC や蔵書目録として刊行するとともに、データベースで検索できる範囲を拡大するための遡及入力の推進が急務となりました。1979年には早くも和図書の遡及入力事業に着手、1999年に、明治時代以降に出版された和図書の書誌情報の遡及入力をすべて終了しました。その後、2002年の関西館の開館に向けて、東京、関西といった場所を問わず所蔵資料を検索できるように、洋図書等に遡及入力の範囲を拡大し、2002年以降も和古書、漢籍、地図資料、音楽録音資料、映像資料等の書誌情報について、計画的に遡及入力を進めてきました。これによって、目録ホールのカード目録（コラムその1）も、OPAC に場所を譲り渡すことが可能になっていったのです。

*遡及入力に関する詳細は、「書誌データの遡及入力の実施状況について」本誌564（2008年3月）号 pp.13-16 を参照。

コラム：懐かしい言葉・新しい言葉

その1 カード目録

国立国会図書館では、目録の共有化のために、作成した目録カードを印刷し、図書館に頒布する「印刷カード事業」を1950年に開始しました。80年代初頭には、年間400万枚以上のカードを頒布していましたが、オンライン目録の普及によって1998年3月で約50年にわたる事業を終了しました。館内で和図書の閲覧用カード目録を維持していた時代には、整理部門の「編成係」が、毎日目録カードを繰り込み、カードボックスがいっぱいになると、カード目録を「展開」していました。「展開」を続けるのか、いつ「凍結」して、新しい目録を編成したほうがよいのかは、閲覧サービスや施設計画

にも大きな影響を与える大問題だったのです。

目録カードの書誌事項を訂正する際に、かみそりを使ってカードの表面を薄くはぎとる技術、カードが2枚以上にわたる場合に、レース糸（もっと昔は「こより」）でカードを結びつける作業、などもすでに遠い昔のこととなりました。

*展開＝カードボックスを増やすなどして、目録カードを移し替えつつ、同じカード目録を拡げていくこと。目録を「延長」するともいう。
*凍結＝カード目録の繰込みをやめ、これ以上同じカード目録を継続しないこと。

2 インターネットと書誌情報・目録のサービス

2.1 Web-OPAC から NDL-OPAC へ

さて、これまではどちらかといえば前史の話。1998年からの10年は、書誌情報にとってもインターネットの時代だったといってよいでしょう。

1996年に最初の国立国会図書館ホームページをインターネットで公開した時点では、書誌情報については、和図書の書誌情報1年分を検索できるようにしたのみでした。2000年3月にホームページを一新し、和図書220万件、洋図書20万件が検索できるWeb-OPACを公開、初めてインターネット上に国立国会図書館の所蔵資料への本格的なアクセス窓口が開かれました。

2002年9月には、10月の関西館開館に先駆けてNDL-OPACをインターネットで公開、収録範囲を明治時代以降の和図書の書誌情報全件、逐次刊行物等に拡大し、同年11月には雑誌記事索引のデータ約540万件を追加しました。特に、1万タイトルに及ぶ和雑誌に掲載されている記事の題名や著者名から論文や記事が検索でき、検索結果から複写申込みも可能な雑誌記事索引の公開は、国内からも、海外の日本研究者からも好評をもって迎えられました。

その後も、NDL-OPACは段階的に収録範囲を拡大、2008年3月時点で、雑誌記事索引も含めると1,759万件の書誌情報が、世界のどこからでも検索できるようになり、文字どおり国立国会図書館のサービス基盤となっています。

*雑誌記事索引に関する詳細は、「雑誌記事索引のご紹介」本誌564(2008年3月)号pp.7-12を参照。

2.2 さまざまなサービス

NDL-OPACばかりではなく、書誌情報の整備、

活用そして提供は、さまざまなかたちで行われています。

(1) 日本全国書誌

国立国会図書館法第7条の規定「館長は、一年を超えない期間ごとに、前期間中に日本国内で刊行された出版物の目録又は索引を作成し、国民が利用しやすい方法により提供する。」に基づき、国立国会図書館で新規に収集整理した国内刊行物の書誌情報の一覧を年50回編集しています。2007年6月末でそれまで刊行してきた冊子体『日本全国書誌』の刊行を終了し、インターネットでの提供に一本化しました。

なお、外部機関に活用していただくための書誌情報の提供は、JAPAN/MARCの頒布(年50回。媒体はCD-R)、J-BISC(年6回CD-ROM)の刊行によっても継続しています。

*全国書誌に関する詳細は、「特集 全国書誌」本誌555(2007年6月)号pp.1-10を参照。

(2) アジア言語 OPAC

NDL-OPACには収録していないアジアの各種言語の所蔵資料を検索するためのOPACとして、2002年から公開しています。主に関西館アジア情報課が所蔵する中国語、朝鮮語、モンゴル語、インドネシア語など10言語の図書、中国語および朝鮮語の逐次刊行物が検索できます。

(3) 総合目録

NDL-OPAC、アジア言語OPACのような所蔵資料のみの目録と異なり、総合目録は、数々の図書館との協力によって、多くの目録を合わせて検索し、求める資料の所在をつきとめ、図書館間の資料相互

図1 インターネットでの書誌情報提供の変遷

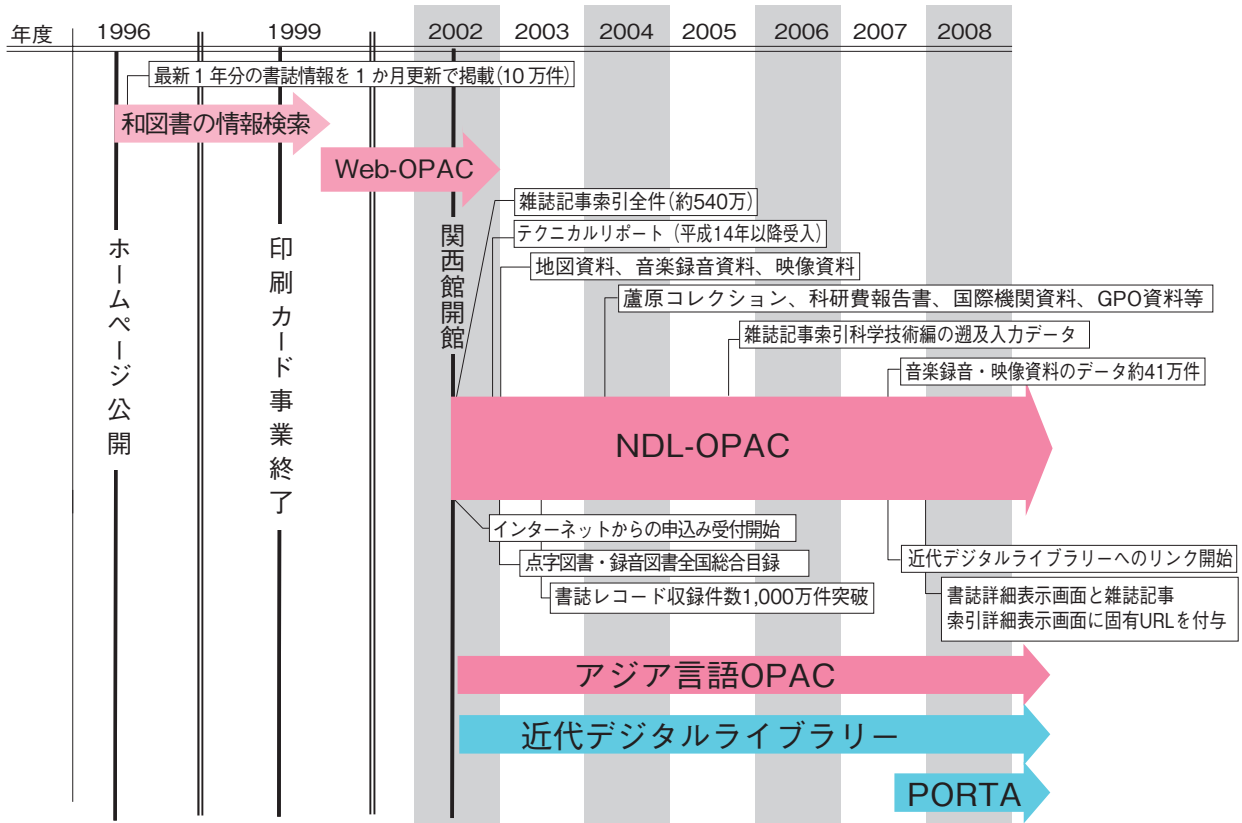
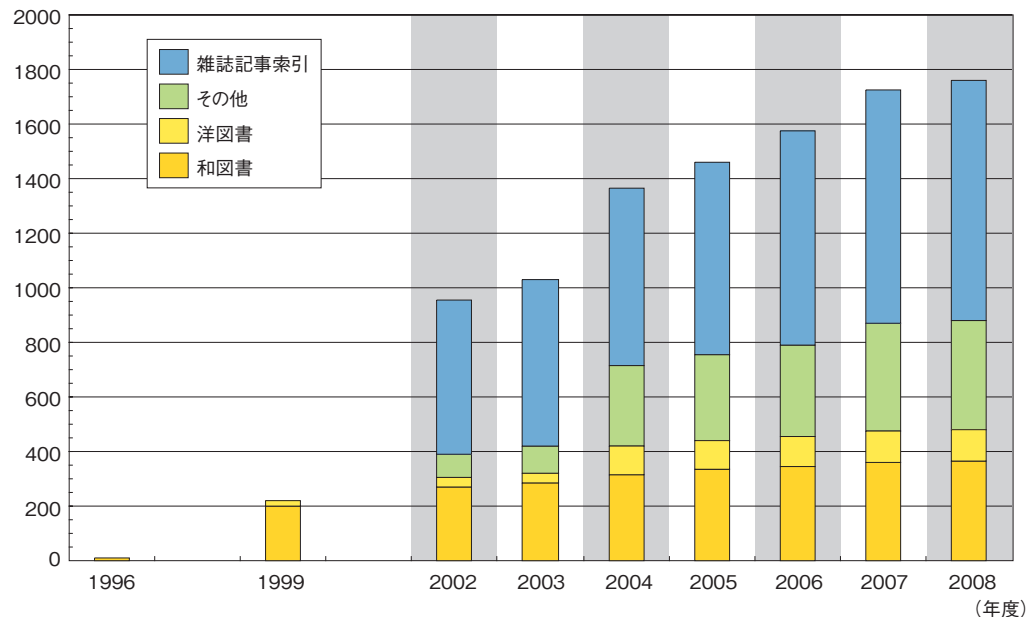


図2 NDL-OPAC収録データ件数の推移



※平成8年度は「和図書の情報検索」、平成11年度はWeb-OPACの収録件数。
 ※数値は年度末。ただし平成20年度は8月の数値。

貸借等にも利用できる目録です。総合目録の作成も国立国会図書館法第21条で国立国会図書館の役割として定められています。

関西館図書館協力課が運営する「総合目録ネットワーク」は、都道府県立および政令指定都市立図書館から和図書の書誌情報の提供を受け、データベースを構築する事業です。1998年に本格的な事業となり、2008年には61の図書館のデータ提供を受け、3,700万件以上の書誌・所蔵情報を収録するデータベースとして成長しました。2004年から、検索機能をインターネットでも公開しています。その他に、「全国新聞総合目録データベース」「点字図書・録音図書全国総合目録」および国際子ども図書館の「児童書総合目録」がインターネットで検索できます。

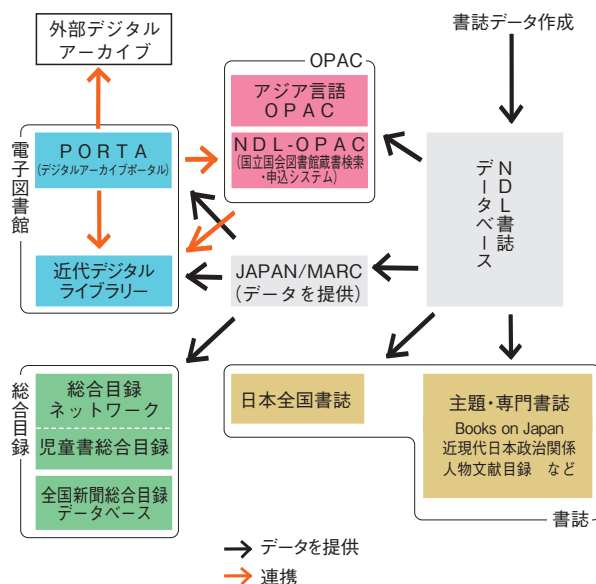
(4) 電子図書館と書誌情報

関西館開館と前後して開始した電子図書館サービスは、書誌情報にも大きな影響を与えました。

デジタル化した明治・大正時代の図書を閲覧する「近代デジタルライブラリー」は、検索のために遡及入力した書誌情報を活用し、さらに目次情報を加えて本文の画像にリンクする仕組みをもつ電子図書館システムです。図書のデジタル化や著作権処理によって、書誌情報を訂正すべき箇所も発見され、その整備にも一役買っていると伺えます。

また、電子情報の書誌情報にあたるものとして、メタデータが登場しました。メタデータは、電子情報を対象とするというだけでなく、従来の書誌情報よりも、インターネット上で共有しやすい記述要素（タイトル、作成者等のデータの項目）や形式をもつことを特徴としています。1990年代後半から、ダブリンコア等の新しい基準が作られてきました。

書誌サービスの関連



国立国会図書館でも、2001年にダブリンコアに基づく「国立国会図書館メタデータ記述要素」を策定し、2002年からWARP（国立国会図書館インターネット選択的蓄積事業）、Dnavi（同データベース・ナビゲーション・サービス）等のインターネット上の情報を扱うサービスを開始しました。

2007年には、2001年のメタデータ記述要素を改訂した「国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述要素（DC-NDL）」を公表しました。日本のデジタルアーカイブの統合検索を行うポータルとして、2007年に公開した「国立国会図書館デジタルアーカイブポータル（PORTA）」は、DC-NDLの記述要素を使って各種のデータを取り込み、統合検索に役立っています。取り込んだデータばかりでなく、外部のデータベースとも横断検索を行い、その他にもさまざまな検索・提供機能をもつPORTAは、今までのOPACによる検索にはとどまらない書誌情報の活用の可能性を示しているといえるでしょう。

ほかにも、特定の専門分野・主題分野の書誌として、日本関係洋書のリストである「Books on Japan」、ある人物に関する文献を調べることのできる「近現代日本政治関係人物文献目録」なども主題情報部等の関係各課が作成しています。これらの書誌は、ホームページの「資料の検索」および「調べ方案内」のメニューからアクセスすることができます。

書誌情報の作成と提供の総括と、標準化などの書誌調整は、収集書誌部が担当していますが、書誌情報の作成や目録の整備にあっている館内の部署はほかにも多くあります。

3 書誌情報のこれから

3.1 目録の仕組み

これまで、どれだけ書誌情報を整備・公開したか、また、どんなサービスやシステムがあるかを中心に述べてきました。もう一つ忘れてはならないのは、目録の信頼性を高め、求める資料をより識別し、選択できるように検索を支援する仕組みです。

目録規則等の適用によって、書誌情報を安定した基準に基づいて作成することはもちろんですが、人物、団体等の名称を統一して記録する典拠ファイル

の作成と維持もその一つです。典拠ファイルに基づいて、著者の名称を書誌情報に記録することによって、その人物の著作を集めること、同姓同名の別人と区別することが可能になります。

また、主題を表わすために統一した語を書誌情報に記録して検索の手がかりとする件名標目も、件名標目表によって維持管理してきました。カード目録の時代から用いてきた「国立国会図書館件名標目表 (NDLSH)」を、データベースの検索でももっと活用できるように、2003年から2006年まで改訂作業を行い、参照形の充実、上位語、関連語、下位語といった件名標目間の関係づけを行いました。これによって、NDL-OPACの検索結果に関連する件名標目を表示し、検索の手がかりにできるようになるなど利用の可能性が広がりました。

このように図書館で培われてきた目録の機能を、ウェブの世界の中でどのように役立てていくのか、世界の図書館が知恵をしばっているところです。さらに目録の機能を追求するため、1998年に国際図書館連盟 (IFLA) が作成した「書誌レコードの機能要件 (FRBR)」のモデルに基づいて、新しい目録規則の制定が進められています (コラムその2)。ある著作に関連するさまざまな集合を作り出し、ユーザを求める情報に確実に案内することが、そのねらいの一つといえるでしょう。

こうした検討に先駆けて、これまでのOPACに替わって公開され始めた図書館の新しい検索システムは、今までの目録の世界に閉じるものでなく、Google等の検索エンジン、Amazon等のオンライン書店、インターネットの百科事典であるWikipediaといったサービス、インターネット上の有用な電子情報にリンクし活用しようとしています。さらに、FRBRのモデルも取り入れながら、書誌情報とし

—コラム：懐かしい言葉・新しい言葉—

その2 FRBR

1990年代後半から、目録の機能を基本から見直そうとの検討が国際図書館連盟 (IFLA) によって行われ、「書誌レコードの機能要件 (Functional Requirements for Bibliographic Records)」が書誌レコードの新しいモデルとして策定されました。FRBRと呼ばれ、“ファーバー”と発音される場合もあります。FRBRの考えかたを取り入れて目録システムを作ることは、「FRBR化 (FRBRization)」と呼ばれたりします。今後の世界中の目録規則の基本となることを意図した「国際目録原則」、そして、「英米目録規則第2版 (AACR 2)」の改訂版である「RDA (Resource Description & Access)」は、両方とも2008年に完成への最終段階に入っていますが、ともにFRBRの概念を基本としたものです。

—コラム：懐かしい言葉・新しい言葉—

その3 ソーシャルタギング、フォークソノミー

件名標目は、図書館が書誌情報に付加している主題キーワードですが、たとえばユーザがインターネット上のコンテンツに情報を付加し合う「ソーシャルタギング (Social tagging)」、主題キーワードや分類をみんなで作り合う「フォークソノミー (Folksonomy)」など、“集合知”の活用は、目録の世界にまでその可能性を拡げようとしています。

て成り立ってきたさまざまなデータが、人や他のシステムによって自由に活用される機能を公開すること、さらに、ユーザによって作り出され、付加されるデータも包含していくことも共通の特徴としているといえます (コラムその3)。

3.2 新しい方針

OPACのインターネットでの提供が一般的になった時代から、館内、外部を問わずさまざまな種類の電子情報にアクセスし、使いこなす時代へと、さらに変化が続いています。ご紹介した国立国会図書館の書誌に関するサービス、たとえばNDL-OPACとアジア言語OPAC、また、総合目録、日本全国書誌は、現在は別々のものですが、統合的な検索機能や相互連携をもつことが課題となってきています。NDL-OPACの検索結果から、「近代デジタルライブラリー」のデジタル化資料へのリンクを設けるなど、できる部分から着手しています。

2008年3月には「国立国会図書館の書誌データの作成・提供の方針(2008)」をとりまとめ、次の六つの方針に基づき、その改善を進めることにしました。

- ①書誌データの開放性を高め、インターネット上での提供を前提として、ユーザが多様な方法で容易に入手、活用できるようにする。
- ②情報検索システムを一層使いやすくする。

③電子情報資源も含めて、多様な対象をシームレスにアクセス可能にする。

④書誌データの有効性を高める。

⑤書誌データ作成の効率化、迅速化を進める。

⑥外部資源、知識、技術を活用する。

2008年から5年間を対象期間と想定して、方策を具体化しつつ、今後の情報サービスを支えるデータの作成と提供を目指していきます。

<関係資料案内>

「国立国会図書館ホームページ」から、本文中のサービス各種を利用できます。次の資料も掲載しています。

・メタデータ基準

<http://www.ndl.go.jp/jp/standards/index.html>

・国立国会図書館件名標目表 (NDLSH)

http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/ndl_ndlsh.html

・国立国会図書館の書誌データの作成・提供の方針 (2008)

<http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/housin2008.pdf>

・「NDL 書誌情報ニュースレター」

書誌関係のさまざまな情報を紹介しています (年4回)。

http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/bib_newsletter/index.html

「書誌レコードの機能要件 (FRBR)」の日本語訳は、日本図書館協会のサイトに掲載されています。

http://www.jla.or.jp/mokuroku/frbr_japanese.pdf

(収集書誌部)

使う人がいる 守る人がいる

第10回 複写

現在、国立国会図書館の東京本館に来館して申し込まれた紙*の即日複写だけでも1日当たり2,200件を超えており、枚数にすると同じく1日につき2万2,000枚以上に及んでいます。複写作業では資料を開いた状態で伏せるため、資料のつくりや劣化の具合によっては破損するおそれがあります。しかも、申込みから30分以内に複写製品をお渡しすることにしていますので、複写作業では、時間を気にしながらも資料を壊さないよう、いっそうの注意が必要です。

このため、複写申込みの受付時に資料の状態を確認した後、複写作業前にも再度確認します。場合によっては複写方法を変更したり、



透明なアクリル板でそっと固定してぶれないようにします。

複写をお断りしたりすることがあります。

例えば、分厚い資料の中央（「のど」）部分をきれいにとってほしいという要望があります。しかし、中央部を鮮明に取るため、複写機に押し付けると、綴じ部分が壊れるおそれがありますので、こうした複写は行いません。資料を傷めないように、しかも綴じ部分もなるべくきれいに複写するには、作業員の技術が求められます。

紙が劣化している資料（例えば、戦前の資料など）は、普通の複写機で伏せて複写するだけで壊れることもありますので、資料を開いて上向きそのまま複写できる複写機を用います（写真）。上向き複写機では、資料に圧力を加えることなく、資料の状態を見ながら作業を行うことができるため、破損のおそれが少なくなります。

ところが、この複写機は一般的なものではなく、当館にもわずかな台数しかありません。また、紙が変色した資料や分厚い資料は一度では読み込めないので、作業に時間がかかります。このため、上向き複写機を使う場合、原則として複写製品の引渡しは後日になります。

このように、国立国会図書館では資料の利用と保存の適切な均衡を保つように努めています。

（資料提供部複写課）

*マイクロ資料を除く、図書や雑誌などの紙の資料のこと。

第19回保存フォーラムから 害虫を入れない・増やさない —図書館における総合的有害生物管理（IPM）—

平成20年9月11日に第19回保存フォーラムを開催し、東京文化財研究所保存修復科学センター生物科学研究室長木川りか氏による講義「図書館における総合的有害生物管理（IPM）とは—概論と取り組みの実例—」、当館収集書誌部資料保存課宇野理恵子による報告「国立国会図書館におけるトラップモニタリング調査報告」を行いました。

1 「図書館における総合的有害生物管理（IPM）とは—概論と取り組みの実例—」

(1) IPM (Integrated Pest Management) とは

多量の化学薬剤を用いずに、複数の方法を合理的に組み合わせて害虫を防除する生物被害対策で、1960年代に農業分野で誕生しました。1990年代以降、文



木川りか氏

化財保存の現場においても導入が進んでいます。その基本は、次の5段階の対処法からなります。

- ① Avoid (虫やカビを誘うものを回避する)
- ② Block (虫などの遮断)
- ③ Detect (虫などの発見)
- ④ Respond (対処)
- ⑤ Recover/Treat (復帰)

この5段階のうち若い番号ほど重要度が高くな

ります。①および②は、IPMの基本であり、清潔な環境管理と虫の進入ルートへの遮断が何よりも徹底すべき点です。③は、早期発見のための目視点検や粘着トラップ等を用いた工夫が挙げられます。④および⑤では、方針に基づく資料への適切な処置と施設設備への対処が求められます。

(2) 取り組みの事例

国内外の資料保存機関における有効な殺虫処理の実践例として、小規模な害虫被害に適した脱酸素剤を用いた低酸素濃度処理（下写真）、ジッパー式テントを用いた二酸化炭素処理、冷凍庫を用いた低温処理が紹介されました。燻蒸剤は安全性に十分な注意が必要であるとの言及がありました。

資料を保管する使命を担う施設における有害生物対策は、資料と人体と環境への安全性に配慮した方法を用いること、Avoid、Blockを基本に体系的に力点を定めて管理・運用していくこと、館内全職員の意識向上と協力が不可欠であることが強調されました。



脱酸素剤による低酸素濃度処理の例

2 「国立国会図書館におけるトラップモニタリング調査報告」

調査は平成18年10月から平成19年9月末までの1年間、当館の政治史料課と古典籍課の書庫



トラップを開いてルーペでしっかり観察します。
(国立国会図書館古典籍課書庫で)

対策に役立てるのが目的です。

1年間のモニタリングの結果捕獲された文化財害虫は、政治史料課ではチャタテムシ計138匹、ゴキブリ計3匹、ヒメマルカツオブシムシの幼虫および抜け殻各1個、古典籍課ではチャタテムシ計79匹でした。捕獲数の多いチャタテムシは体長1mmほどの極小の虫で、家屋内等でも多く発生し、被害は非常に軽微です。書庫の四隅、出入口付近、特に事務スペースと通じる書庫入口付近で多くの虫が捕獲されているのが発見されました。結果については、モニタリング期間終了後に木川氏から、緊急の処置を必要としない捕獲数であるとの講評を得ました。

また、調査期間中、書庫のトラップ設置範囲外のスチールキャビネット内で保管されていた資料

で、所定箇所に設置した補虫用粘着トラップを2週間に1度定期観察したもので(左写真)、書庫内環境を把握して今後の有害生物

に、シバンムシが発生したため、資料保存課で低酸素濃度処理による殺虫処置を行いました。この資料は古書店で購入した際に虫の卵等がついていた可能性が高いと推測されました。この事例からもわかるように、資料の受入時に害虫を書庫に入れないことが重要です。この調査を取りまとめた調査チームは、配架前資料の殺虫処置、書庫への害虫進入防止策、清掃、点検、そして職員の意識向上を提言しました。

3 質疑応答

参加者から殺虫および予防のために樟脳、パラジクロロベンゼンなど、各種の防虫剤を使用することについて、質問が多く寄せられました。木川氏からは、防虫剤の使用は、害虫の数や人手なども考慮しつつ、各薬剤の特徴・効果・安全性を的確に理解して使用すべきであることが指摘され、各々のケースへの助言がありました。



会場の一角には展示コーナーを設け、文化財害虫の標本、補虫用粘着トラップ、脱酸素剤を用いた殺虫法の見本等を展示しました。写真はトラップで捕獲した虫を顕微鏡で見ている参加者。

(収集書誌部資料保存課)

無味乾燥な数字の裏に…

<司会者>「さて問題です。平成20年度の国の当初歳出予算は、一般会計で83兆613億3991万3千円。では、このうち国立国会図書館の占める割合は何%でしょう?」<しばしBGM♪>

正解は約0.03%。クイズ番組風のシチュエーションは妄想ですが、数字は本当です。率で見るとわずかですが、金額にすると、それでも219億6514万2千円。普段の生活からは、なかなか実感がわかない規模です。しかし、この数字も、実は図書ラベル1枚2円といった、個々の必要経費の積み上げから成り立っています。

会計課予算係では、こうした予算の計数管理や、財務省との折衝を主に担当しています。予算ができるまでをざっくりとたどると、

～8月：概算要求の方針決定

8月末：内閣に概算要求書を提出

9月～12月：財務省との事務折衝

12月下旬：内閣による概算決定

～3月末：国会審議を経て予算成立

といった流れになります。

このうち係にとってのハイシーズンになるのが、8月から年末にかけてです。こちらが要求する予算の必要性を主張するのに対し、財務省の担当者は、その主張の妥当性や適切さを厳しく問ってきます。ときにはそのやり取りが深夜に及ぶこともあります。それに応じて要求額は



徐々に変化していきますが、その各段階において数字に間違いが出ないように、電卓を叩いての入念なチェックも行います。こうして年末には予算政府案が固まり、国会での審議に付されるのです。

ご存知のとおり、国の財政状況は厳しく、当館の予算もここ数年は減少傾向にあります。そんな状況下でもサービスを向上・維持できるよう、予算係では館内の各部局とともに日々検討を重ねています。私なぞは、つつい「もっと予算を～」という方向にのみ頭が行ってしまうのですが、もとはといえば税金、国民のみなさまの理解が得られるような要求になっているだろうかと思いつきながら、今夜も電卓片手に数字とのにらめっこが続きます。

(総務部会計課 なまぐさ坊主)

第31回
国際児童図書評議会
(IBBY) 世界大会

9月7日～10日、デンマークのコペンハーゲンにおいて、第31回国際児童図書評議会（IBBY）世界大会が開かれ、当館からは、国際子ども図書館資料情報課副主査小沼里子が参加した。IBBY世界大会は1953年以降隔年で開催され、「歴史における物語—物語における歴史」をテーマとする今大会には、世界各国から、児童書の普及や研究、読書推進活動に携わる約500人が参加した。

7日に開会式および児童文学におけるノーベル賞に例えられる「国際アンデルセン賞」の授与式が行われ、作家賞はスイスのユルク・シュービガー、画家賞はイタリアのロベルト・インノチェンティが受賞した。

8日から10日までは、基調講演や分科会のほか、IBBY各国支部が選ぶ外国に紹介したい自国の優良作品のリストである「IBBYオナーリスト2008」授与式や、子どもの読書を推進する独創的な活動をたたえる「IBBY朝日国際児童図書普及賞」授与式、同賞受賞者によるプロジェクト発表なども行われた。

IBBY設立の目的の一つが、子どもの本を通じて国際理解を促進し、平和への心を育むことであるが、今大会では過去や現在の世界情勢を反映し、地域紛争などで過酷な状況下に置かれた子どもと子どもの本についての講演が多かった。

平成20年度「国立国会図書館データベースフォーラム」

9月17日、東京本館および関西館において、標記フォーラムを開催した。これは当館のホームページで提供しているデータベースやコンテンツを紹介する催しである。デジタルアーカイブポータル（PORTA）やNDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム）をはじめとして、東京本館では国会会議録などの19のデータベース/コンテンツ、関西館ではアジアに関する情報を調べるためのリンク集など15のデータベース/コンテンツを紹介した。また、会場前にパソコン数台を設置してデモンストレーションを行うとともに、希望者には館内見学ツアーを実施した。東西合わせて400名を超える参加があった。

フォーラムの資料と東京本館でのフォーラムの録画映像は当館ホームページ「刊行物」—「記録集」—「国立国会図書館データベースフォーラム」配布資料（<http://www.ndl.go.jp/jp/dbforum/handouts.html>）から利用できる。なお、録画映像は、文部科学省の教育情報通信ネットワーク「エル・ネット」を通じてインターネット配信される（「エル・ネット」—「6ch イベント・事業案内」（http://www.elnet.go.jp/elnet_web/portalTop.do）に掲載）。

お知らせ

児童書デジタルライブラリー に約 500 タイトルの資料を 追加しました



「児童書デジタルライブラリー」トップ

「児童書デジタルライブラリー」では、国立国会図書館が所蔵する昭和30年以前に刊行された児童書をデジタル化し、著作権者の許諾を得た資料および著作権の消滅した資料の本文画像をインターネットで提供しています。

今年度は、490 タイトルを追加し、1,687 タイトルを閲覧できるようになりました。

今回追加した資料には、グリムの『ハツ山羊』（明治20年）などの翻訳児童書から『コルプス先生汽車へのる』（昭和23年）などの戦後の児童文学まで幅広く含まれています。

なお、明治・大正時代の児童書は「近代デジタルライブラリー」(<http://kindai.ndl.go.jp>) に収録されているものもありますので、そちらもあわせてご利用ください。



「ハツ山羊」 呉文聡訳 弘文社 明治20

○ URL <http://www.kodomo.go.jp/ji-digi/>

国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp>) トップ
「資料情報サービス」-「資料の検索」-「児童書デジタル・ライブラリー」

○お問い合わせ先

国立国会図書館国際子ども図書館 資料情報課情報サービス係
電話 03-3827-2053 (代表)

第569/570 (2008年8/9月) 号の訂正とお詫び

・5ページ左、下から2行目と写真のキャプションに『珉江入楚』と掲載いたしましたが、正しくは『岷江入楚』でした。
ここにお詫びして訂正いたします。



お知らせ

年末年始のご利用について

○休館期間

次の期間は、休館いたします。

東京本館・関西館

平成20年12月26日(金)～平成21年1月5日(月)

国際子ども図書館

平成20年12月28日(日)～平成21年1月5日(月)

○NDL-OPAC

NDL-OPACからの資料検索、複写申込みは年末年始の休館期間中も可能です。
(複写製品の発送は1月6日以降になります)

○来館申込みによる後日複写

平成20年の最終開館日までに複写製品の受取りを希望される場合は、下の表に示した日までにお申し込みください。

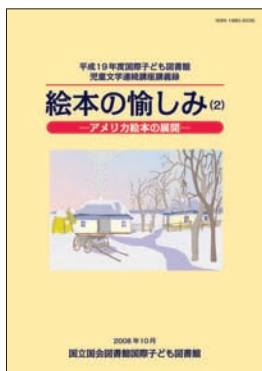
複写の種類	東京本館	関西館	国際子ども図書館
電子式複写	12/20(土)	12/20(土)	12/19(金)
マイクロフィッシュからの引伸印画	12/20(土)	12/20(土)	12/19(金)
マイクロフィルムからの引伸印画	12/20(土)	12/20(土)	12/19(金)
フィルムからフィルムへのプリント	12/20(土)	12/16(火)*	12/18(木)
フィッシュからフィッシュへのプリント	12/20(土)	12/16(火)*	12/18(木)
撮影によるネガフィルムの作製	12/20(土)	12/16(火)*	12/18(木)
撮影からの引伸印画	12/16(火)	12/12(金)*	12/13(土)
撮影からのポジフィルム作製	12/16(火)	12/12(金)*	12/13(土)

*印は、受取方法が郵送のみです。期日までの受付分が年内の発送となります。

お知らせ

新刊案内

国立国会図書館の 編集・刊行物



平成19年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録

「絵本の愉しみ(2)ーアメリカ絵本の展開ー」 A4 173頁 年刊 1,890円
発売 日本図書館協会 (ISBN 978-4-87582-672-9)

- ・草創期ーワンダ・ギャグ以前
- ・開花期ー第二次世界大戦末まで
- ・発展期ー第二次世界大戦後
- ・最盛期ーモーリス・センダック その1 / その2
- ・非日常の世界ー物語る手法のからくり
- ・参考図書の紹介ーアメリカの絵本を知るためのブックリスト
- ・絵本ギャラリーの紹介



国立国会図書館開館60周年記念貴重書展 学ぶ・集う・楽しむ

A4 115頁 1,800円 発売 山越 (ISBN 978-4-87582-674-3)

開館60周年を記念して東京本館と関西館で行った貴重書展の図録。重要文化財を含む77点の展示資料の図版と解説、資料・人物についてのコラム等を収録。

- ・第1部 学ぶ ～古典の継承～
- ・第2部 集う ～知の交流～
- ・第3部 楽しむ ～絵入り本の様ざま～
- ・重要文化財



レファレンス 693号 A4 103頁 月刊 1,050円 発売 日本図書館協会

- ・ロシアの森林と法
- ・米国における軍事施設周辺の土地利用対策
- ・EUの食品安全法制
- ・社会保障財政の国際比較(資料)

入手のお問い合わせ

日本図書館協会 〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 03(3523)0812

山越 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-12-18 03(5413)7778

CONTENTS

- 02 Research materials (concerning arms and harness) collected by Nobumitsu KURIHARA, an expert on ancient rites and practices – focusing on materials for *Kokon Yoranko*
(Book of the month - from NDL collections)
- 04 Talks with the Librarian of NDL (2) Mr. Koichi KABAYAMA, Director of the Printing Museum, Tokyo
Human intellectual property and libraries
- 15 Exhibition in the Monthly Bulletin
World of Illustrations for Children - Picture Magazines and Their Artists
- 24 Series commemorating the NDL's 60th anniversary
“1998-2008” Topics during the last decade and future prospects
(6) Bibliographic information in the digital age – ten years of catalogs
- 31 People who use, people who maintain (10) Copying
- 32 Report of the 19th forum on preservation
Keeping pests out or down - integrated pest management in libraries (IPM)
- 13 Books not commercially available
・Naoe Kanetsugu Tokubetsuten
・Inasaku to tomoni tsutawatta buki - Heisei 19-nen shunki tokubetsuten
- 34 Tidbits of information on NDL
Behind dry numbers
- 35 NDL NEWS
・The 31st International Board on Books for Young People (IBBY) World Congress 2008
・NDL Database Forum in FY 2008
- 36 < Announcements >
・Five hundred titles added to the Digital Library of Children's Literature
・Library services at the year-end and New Year
・Book notice - publications from NDL

国立国会図書館月報

平成20年11月号 (No.572)

平成20年11月20日発行 定価525円
(本体500円)

発行所 国立国会図書館
編集責任者 網野光明
東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03(3581)2331(代表)
FAX 03(3597)5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

発売 社団法人日本図書館協会
東京都中央区新川1-11-14
電話 03(3523)0812(代表)
FAX 03(3523)0842
E-mail hanbai@jla.or.jp
印刷所 株式会社平文社

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜すいして転載される場合には、事前に当館総務部総務課に連絡してください。本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ(<http://www.ndl.go.jp> - 「刊行物」 - 「国立国会図書館月報」)でご覧いただけます。



『詩經名物図解』から「鹿ノ口」
細井徇撰 嘉永4(1851)跋 10帖 27cm 手稿本
<寄別10-8>

国立国会図書館月報

平成20年11月20日発行 (毎月1回20日発行)
(11月号通巻572号)

発売： 社団法人 日本図書館協会 定価 525円 (本体 500円)